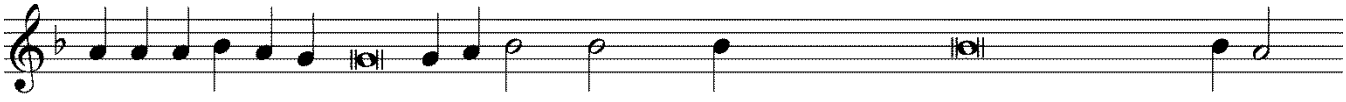
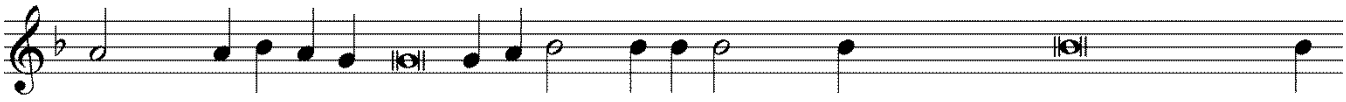
【　復活讃詞　第７調　】

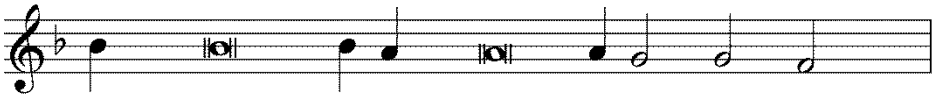
ハリスト　スか　みよ　、なんぢは　じゅうじかにてしをほろぼ　し　、とうぞ
神　爾　十　字架　死　滅　盗　賊



くのためにらくえんをひら　き　、けいこうぢょのかなしみをなぐさ
爲　樂　園　開　攜　香　女　悲　慰

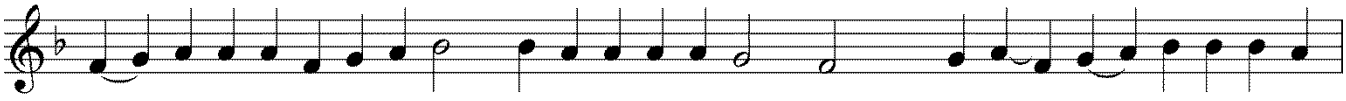


め　、しとになんぢがふくか　つして　、せかいにおおいなるあわれ
使徒　爾　復　活　世界　大　憐

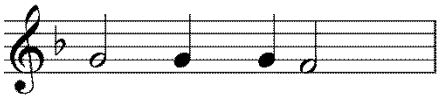


みをたまいしをつたえさせたま　え　り　。
賜　傳　給

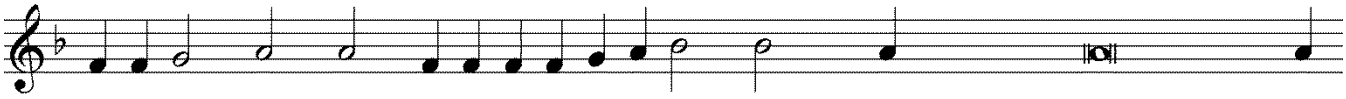
【　三歌齋經の讃詞　第１調　】



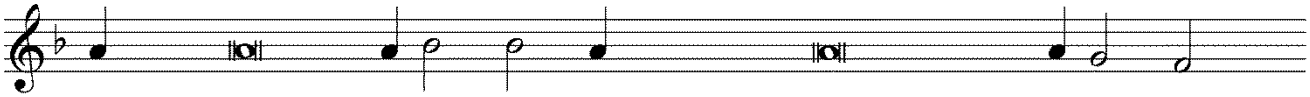
こぉえいはちちとこ　とせいしんにき　す　、いま　も　いつもよ
光　榮　父　子　聖　神　歸　今　何時　世



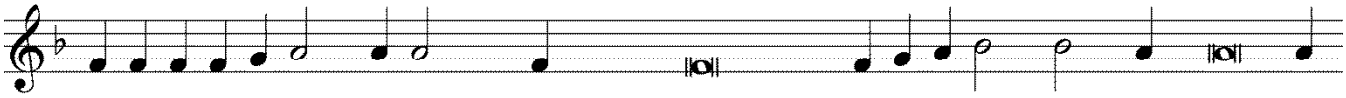
よ　に、アミ　ン。
世



ほうし　んな　る　わがしんぷ　イオア　ンよ　、なんぢはのじゅうしゃにして
捧　神　我　神父　爾　野　住　者

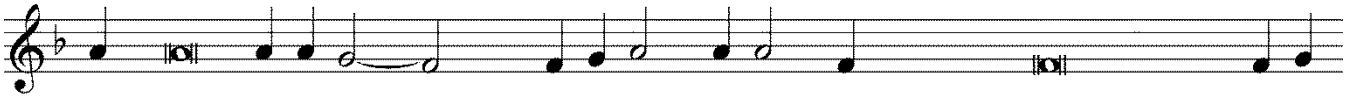


にくたいにおけるて　んし　およびきせきしゃとあらわれた　り　。
肉　體　於　天　使　及　奇跡　者　顯

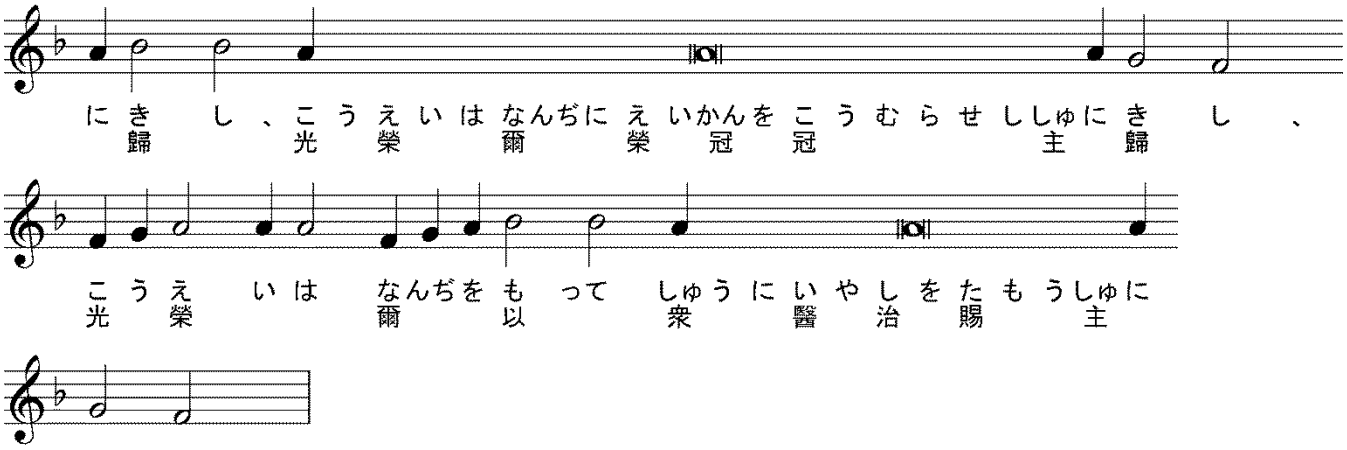


なんぢはものい　みと　、けいせいと、きとうとをもって　てんのおんしを
爾　齋　警　醒　祈祷　以　天　恩賜

え　て　、しんをもってな　んぢにはしりつくもの　の　れいたいのやま
獲　信　以　爾　趨　附　者　靈　體　病

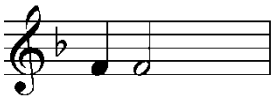


いをいやしたも　　う。こうえ　いは　なんぢにちからをあたえししゅ
醫　給　光　榮　爾　力　與　主

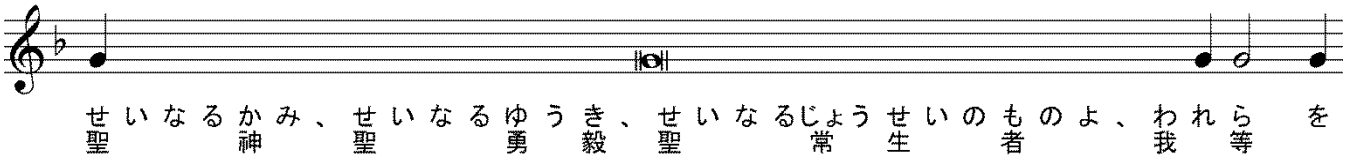


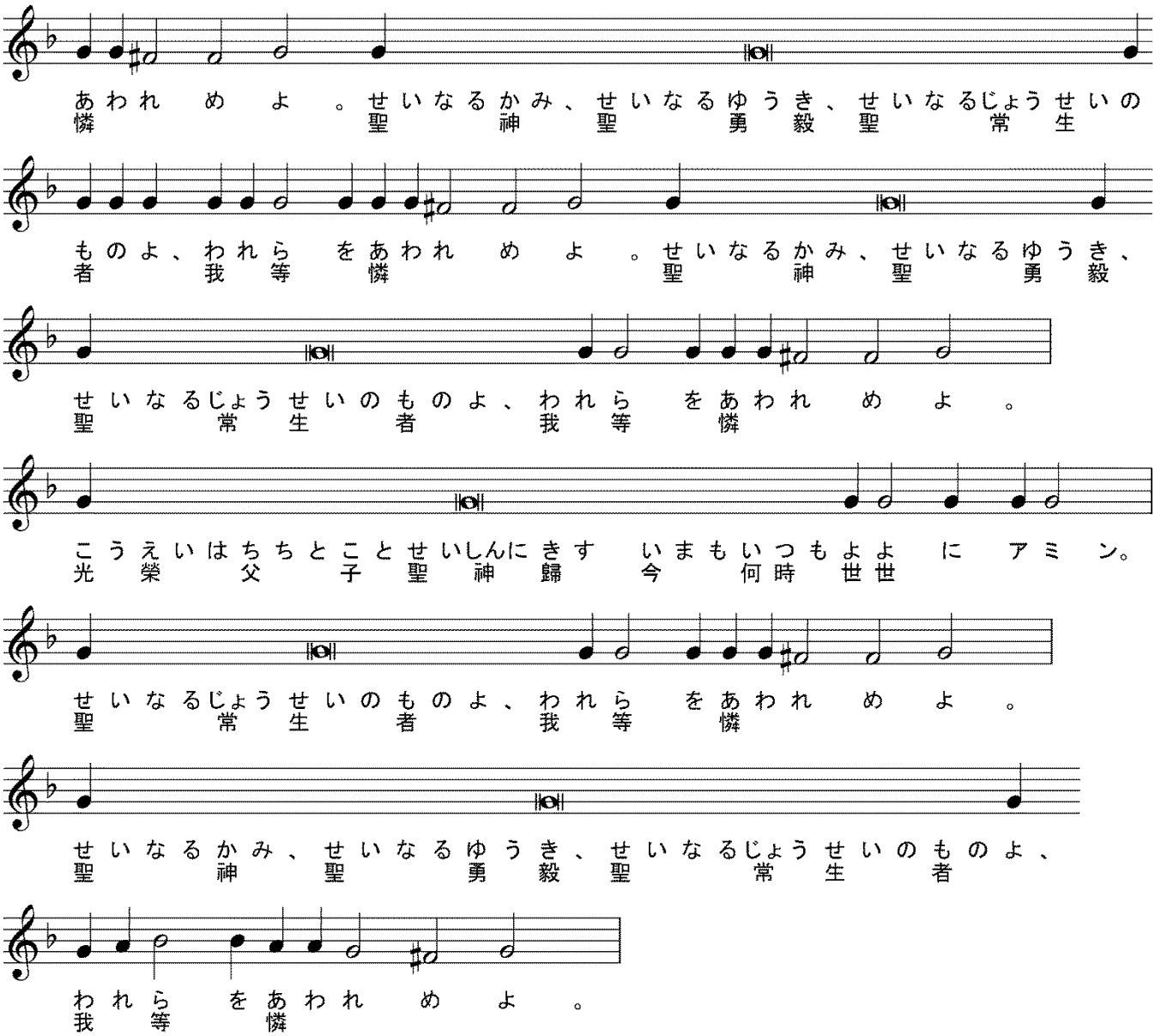
司祭）（ 黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行う者を棄てずして、其救の爲に痛悔を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讃榮を奉るに堪うる者となしし主宰よ、爾 親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體とを聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 ）

司祭）蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾 父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、



【 聖三祝文 】

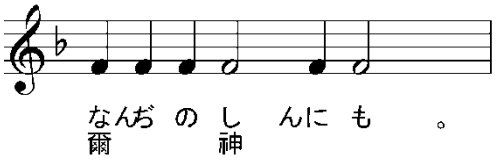




司祭）（ 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、 ）

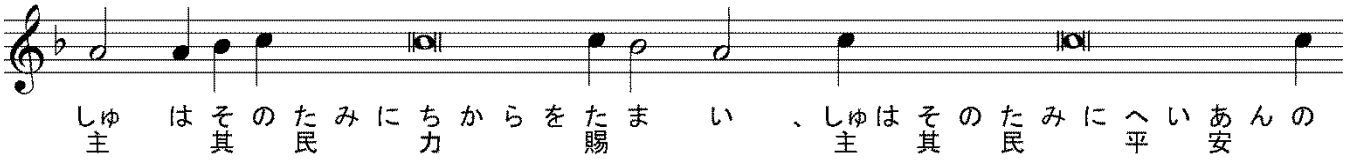
【 提綱（プロキメン）主日第７調・克肖者の、第７調 】

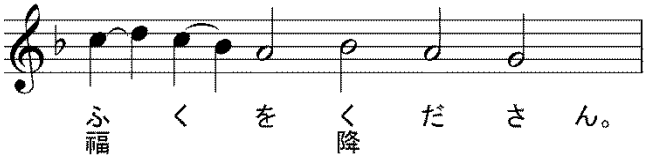
司祭）慎みて聽くべし、衆人に平安、



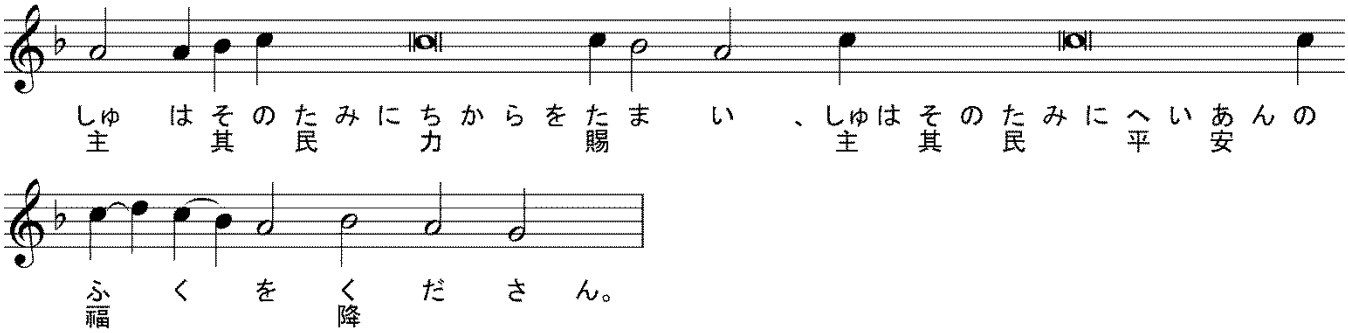
司祭）睿智、

誦經）プロキメン、主は其民に力を賜い、主は其民に平安の福を降さん、

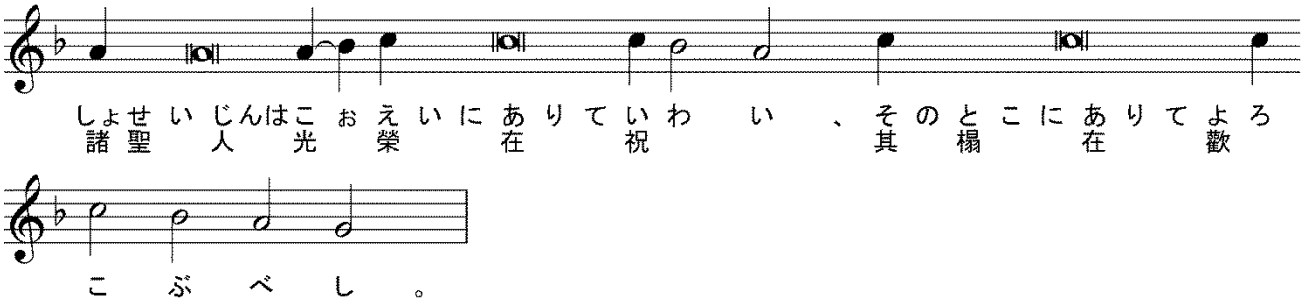




誦經）神の諸子よ、主に獻ぜよ、光榮と尊貴とを主に獻ぜよ、



誦經）諸聖人は光榮に在りて祝い、其榻に在りて歡ぶべし。



【　使徒經（アポストロス）314端　エウレイ書6章13節～20節　】

司祭）睿智、

誦經）聖使徒パヴェルがエウレイ人に達する書の讀、

司祭）謹みて聽くべし、

誦經）兄弟よ、神はアヴラアムに許約を賜う時、己より大なる者の一も指して誓うべきなきが故に、己を指して誓いて云えり、我必祝福して爾を祝福し、益して爾を益さんと。斯くアヴラアムは恒忍して、許約せられし所を獲たり。蓋人は己より大なる者を指して誓ふ、且事を確證する誓は彼等の凡の爭論を息む、故に神も許約を嗣ぐ者に、己の旨の易らざるを更に明に示さんと欲して、別に誓を立てたり、斯の二の易らざる者に於て神は謊る能わざるが故に、我等斯の二の者を以て確なる慰を得ん爲なり、蓋我等は趨りて我が前に在る望を執る者なり。此の望は我等の靈の爲に堅くして、動かざる錨の如し、且幔の内に入る、即イイススがメル

キセデクの班に循いて、世世の司祭長と爲りて、我等の爲に前驅として入りし所なり。

＊＊

（比較用　口語訳）神がアブラハムに対して約束されたとき、さして誓うのに、ご自分よりも上のものがないので、ご自分をさして誓って、「わたしは、必ずあなたを祝福し、必ずあなたの子孫をふやす」と言われた。このようにして、アブラハムは忍耐強く待ったので、約束のものを得たのである。いったい、人間は自分より上のものをさして誓うのであり、そして、その誓いはすべての反対論を封じる保証となるのである。そこで、神は、約束のものを受け継ぐ人々に、ご計画の不変であることを、いっそうはっきり示そうと思われ、誓いによって保証されたのである。それは、偽ることのあり得ない神に立てられた二つの不変の事がらによって、前におかれている望みを捕えようとして世をのがれてきたわたしたちが、力強い励ましを受けるためである。この望みは、わたしたちにとって、いわば、たましいを安全にし不動にする錨であり、かつ「幕の内」にはいり行かせるものである。その幕の内に、イエスは、永遠にメルキゼデクに等しい大祭司として、わたしたちのためにさきがけとなって、はいられたのである。

＊＊

【　使徒經（アポストロス）229 端　エフェス書 5 章 9 節～19 節　】

司祭）睿智、

誦經）聖使徒パヴェルがエフェス人に達する書の讀、

司祭）謹みて聽くべし、

誦經）兄弟よ、光の子の如く行え。蓋神の實は凡の慈愛と公義と眞實とに在り。爾等神の悦ぶ所の何なるを審にせよ、實を結ばざる暗昧の行に與る勿れ、寧之を責めよ。蓋彼等が隱に行う事は、言うも亦耻づ可し。凡そ責めらるる事は光に由りて顯る、蓋凡そ顯るる事は光なり。故に云えるあり、寐ぬる者起きよ、死より復活せよ、ハリストス爾を照さん。是を以て視よ、行を愼みて無智の者の如くせず、乃智ある者の如くせよ、時を惜むべし、日は惡しけらばなり。是の故に思慮なき者と爲る勿れ、乃神の旨の何なるを覺れ。又酒に醉う勿れ、此れに由りて放蕩あり、乃神に滿てられよ。聖詠と歌頌と屬神の詩賦とを以て、口に唱え、心に和して、主を讚美せよ。

＊＊

（比較用　口語訳）光の子らしく歩きなさい―― 光はあらゆる善意と正義と真実との実を結ばせるものである―― 主に喜ばれるものがなんであるかを、わきまえ知りなさい。 実を結ばないやみのわざに加

わらないで、むしろ、それを指摘してやりなさい。 彼らが隠れて行っていることは、口にするだけでも恥ずかしい事である。 しかし、光にさらされる時、すべてのものは、明らかになる。 明らかにされたものは皆、光となるのである。だから、こう書いてある、「眠っている者よ、起きなさい。死人のなかから、立ち上がりなさい。そうすれば、キリストがあなたを照すであろう」。そこで、あなたがたの歩きかたによく注意して、賢くない者のようにではなく、賢い者のように歩き、 今の時を生かして用いなさい。今は悪い時代なのである。 だから、愚かな者にならないで、主の御旨がなんであるかを悟りなさい。 酒に酔ってはいけない。それは乱行のもとである。むしろ御霊に満たされて、 詩とさんびと霊の歌とをもって語り合い、主にむかって心からさんびの歌をうたいなさい。

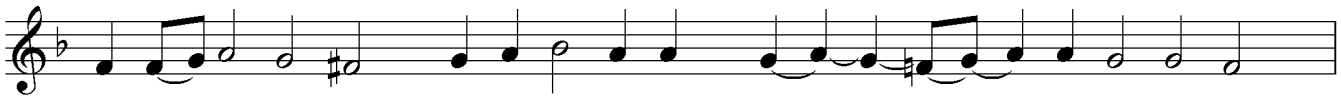
＊＊

司祭）爾(なんぢ)に平安(へいあん)、

誦經）爾(なんぢ)の神(しん)にも、アリルイヤ、

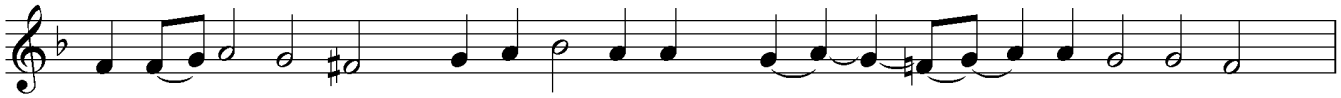
【　アリルイヤ　主日第７調・克肖者の、第７調　】

司祭）睿智(えいち)、



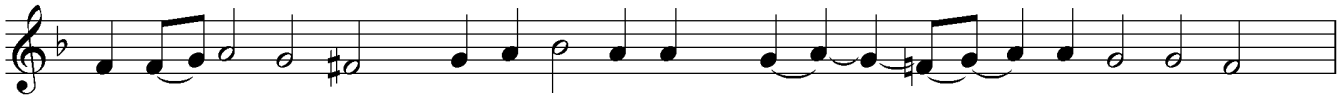
ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 。

誦經）至上者(しじょうしゃ)よ、主(しゅ)を讃榮(さんえい)し、爾(なんぢ)の名(な)に歌(うた)うは美(び)なる哉(かな)、



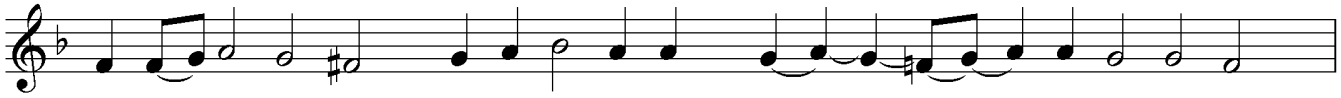
ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 。

誦經）爾(なんぢ)の憐(あわれみ)を朝(あさ)に宣(の)べ、爾(なんぢ)の眞(まこと)を夜(よ)に宣(の)ぶるは美(び)なる哉(かな)、



ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 。

誦經）彼等(かれら)は主(しゅ)の宮(みや)に植(う)えられて、我(わ)が神(かみ)の庭(にわ)に榮(さか)ゆ、



ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 。

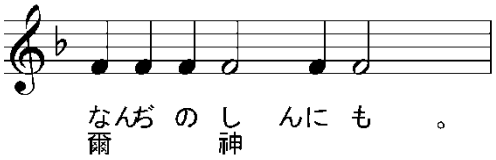
司祭）（　黙誦: 人(ひと)を愛(あい)する主宰(しゅさい)よ、我(わ)が心(こころ)に神(かみ)を知(し)る智慧(ちえ)の浄(いさぎよ)き光(ひかり)を輝(かがや)かし、我(わ)が思念(しねん)の目(め)を啓(ひら)きて、爾(なんぢ)が福音(ふくいん)の教(おしえ)を悟(さと)らしめ給(たま)え、我(わ)が衷(うちなんぢ)に爾(なんぢ)の福(ふく)たる誡(いましめ)を畏(おそ)るる畏(おそれ)をも入(い)れて、我等(われら)が悉(ことごと)くの肉體(にくたい)の慾(よく)を踏(ふ)み、凡(およ)そ爾(なんぢ)の喜(よろこ)ぶ所(ところ)を思(おも)い且(か)つ行(おこな)いて、屬神(ぞくしん)の生活(せいかつ)を過(す)ぐるを致(いた)させ給(たま)え、蓋(けだし)ハリストス神(かみ)よ、

爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

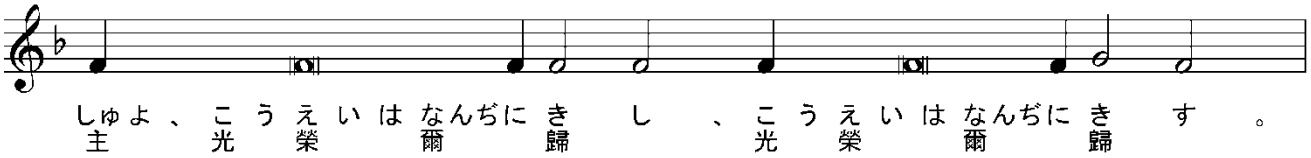
て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。　）

【　福音經（エヴァンゲリオン）　マルコ福音書40端　9章17～31節　】

司祭）睿智、肅みて立て聖福音經を聽くべし、衆人に平安、



司祭）マルコ傳の聖福音經の讀、



司祭）謹みて聽くべし、

司祭）彼の時或人イイススに就きて、伏拜して曰えり、師よ、我瘖の鬼に憑られたる我が子を爾に攜え來れり。鬼は何處に彼を執うとも、投げ仆し、彼沫を噴き、齒を切み、體枯る、我爾の門徒に之を逐い出ださんことを請いたれども、彼等能わざりき。イイスス彼に答えて曰く、噫信なき世や、我何時までか爾等と偕に在らん、何時までか爾等を忍ばん、彼を我が許に攜え來れ。乃彼を攜え來れり、彼イイススを見れば、鬼忽彼を拘攣させ、彼地に仆れ輾びて沫を噴けり。イイスス其父に問えり、彼に斯く爲りしは何の時よりか。曰えり、幼き時よりなり。鬼は彼を滅さん爲に、屢火に又水に投じたり。爾若し何をか能せば、我等を憫みて、我等を助けよ。イイスス之に謂えり、爾若し幾何か信ずることを能せば、信ずる者には能せざることなし。童子の父直に涙を垂れて、呼びて曰えり、主よ、我信ず、我が不信を助けよ。イイスス民の趨せ集るを見て、汚鬼を禁めて、之に謂えり、瘖にして聾なる鬼よ、我爾に命ず、彼より出でて、再彼に入る勿れ。鬼號びて、甚しく彼を拘攣させて出でたり、彼は死せし者の若くなりて、多くの者彼死せりと云うに至れり。イイスス其手を執りて、彼を起したれば、彼即立てり。イイスス家に入りし時、其門徒私に彼に問えり、我等が之を逐い出だす能わざりしは何

の故ぞ。彼曰えり、祈禱と齋とに由らざれば、此の類は出づるを得ざるなり。彼等彼處を出でて、ガリレヤを過ぐ、彼は人の之を知らんことを欲せざりき。蓋其門徒に教えて、人の子には人人の手に付され、人人彼を殺し、殺されて後彼第三日に復活せんと曰えり。

＊＊

（比較用　口語訳）群衆のひとりが答えた、「先生、おしの霊につかれているわたしのむすこを、こちらに連れて参りました。霊がこのむすこにとりつきますと、どこででも彼を引き倒し、それから彼はあわを吹き、歯をくいしばり、からだをこわばらせてしまいます。それでお弟子たちに、この霊を追い出してくださるように願いましたが、できませんでした」。イエスは答えて言われた、「ああ、なんという不信仰な時代であろう。いつまで、わたしはあなたがたと一緒におられようか。いつまで、あなたがたに我慢ができようか。その子をわたしの所に連れてきなさい」。そこで人々は、その子をみもとに連れてきた。霊がイエスを見るや否や、その子をひきつけさせたので、子は地に倒れ、あわを吹きながらころげまわった。そこで、イエスが父親に「いつごろから、こんなになったのか」と尋ねられると、父親は答えた、「幼い時からです。霊はたびたび、この子を火の中、水の中に投げ入れて、殺そうとしました。しかしできますれば、わたしどもをあわれんでお助けください」。イエスは彼に言われた、「もしできれば、と言うのか。信ずる者には、どんな事でもできる」。その子の父親はすぐ叫んで言った、「信じます。不信仰なわたしを、お助けください」。イエスは群衆が駆け寄って来るのをごらんになって、けがれた霊をしかって言われた、「おしとつんぼの霊よ、わたしがおまえに命じる。この子から出て行け。二度と、はいって来るな」。すると霊は叫び声をあげ、激しく引きつけさせて出て行った。その子は死人のようになったので、多くの人は、死んだのだと言った。しかし、イエスが手を取って起されると、その子は立ち上がった。家にはいられたとき、弟子たちはひそかにお尋ねした、「わたしたちは、どうして霊を追い出せなかったのですか」。すると、イエスは言われた、「このたぐいは、祈によらなければ、どうしても追い出すことはできない」。それから彼らはそこを立ち去り、ガリラヤをとおって行ったが、イエスは人に気づかれるのを好まれなかった。それは、イエスが弟子たちに教えて、「人の子は人々の手にわたされ、彼らに殺され、殺されてから三日の後によみがえるであろう」と言っておられたからである。

＊＊

【　福音經（エヴァンゲリオン）　マトフェイ福音書10端　4章25～5章12節　】

司祭）睿智、イォアン傳の聖福音經の讀、謹みて聽くべし、

司祭）彼の時、ガリレヤ、デカポリ、イエルサリム、イウデヤ、イオルダンの外より衆くの民彼に從えり。イイスス群衆を見て、山に登れり、既に坐せしに、其門徒彼に就けり。彼口を啓きて、之を教へて曰えり、神の貧しき者は福なり、天國は彼等の有なればなり。泣く者は福なり、彼等慰を得んとすればなり。温柔なる者は福なり、彼等地を嗣がんとすればなり。義に飢え渇く者は福なり、彼等飽くを得んとすればなり。矜恤ある者は福なり、

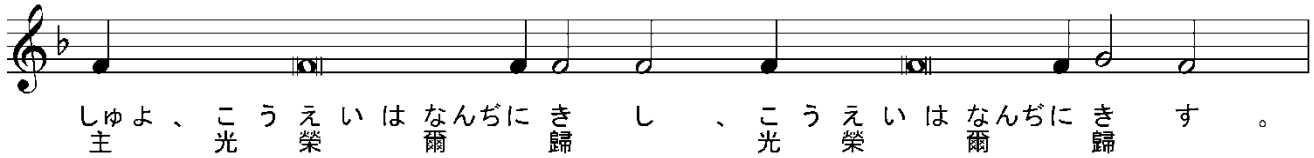
彼等矜恤を得んとすればなり。心の清き者は福なり、彼等神を見んとすればなり。和平を行う者は福なり、彼等神の子と名づけられんとすればなり。義の爲に窘逐せらるる者は福なり、天國は彼等の有なればなり。人我の爲に爾等を詬り、窘逐し、爾等の事を譌りて諸の惡しき言を言わん時は、爾等福なり、喜び樂めよ、天には爾等の賞多ければなり。

＊＊

（比較用　口語訳）

こうして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ及びヨルダンの向こうから、おびただしい群衆がきてイエスに従った。イエスはこの群衆を見て、山に登り、座につかれると、弟子たちがみもとに近寄ってきた。そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて言われた。「こころの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。悲しんでいる人たちは、さいわいである、彼らは慰められるであろう。柔和な人たちは、さいわいである、彼らは地を受けつぐであろう。義に飢えかわいている人たちは、さいわいである、彼らは飽き足りるようになるであろう。あわれみ深い人たちは、さいわいである、彼らはあわれみを受けるであろう。心の清い人たちは、さいわいである、彼らは神を見るであろう。平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであろう。義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。わたしのために人々があなたがたをののしり、また迫害し、あなたがたに対し偽って様々の悪口を言う時には、あなたがたは、さいわいである。喜び、よろこべ、天においてあなたがたの受ける報いは大きい。

＊＊



※聖體礼儀③　へ